北梅本乙井遺跡の調査について

平成 24 年 9 月 30 日（日）
公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

１．はじめに

（仮称）葉在池古墳公園は平成 26 年開園を目標に整備が始まります。この整備の一環として、古墳丘陵西麓にガイダンス施設が建設される予定です。これに先立って、平成 23 年度、建設予定地内に遺跡が存在しているかどうかの確認調査を実施したところ、用地の一部から縄文時代早期（今からおよそ７～ 8,000 年前）の土器が発見されました。この時代の遺物の出土は、有名な久万高原町上黒岩遺跡や西予市穴神洞・中津川洞遺跡などの岩陰や洞窟遺跡での出土例がありますが、松山市内での出土は非常に珍しく、今回が近隣の上苅屋遺跡３次調査に続く２例目ということになります。そこで、このような古い時代の縄文土器や石器がどのような状態で地下に埋まっているのか、当時の祖先の暮らした痕跡がこの場所に残っているのかどうかなどを知るために発掘調査を行っています。

２．調査の概要

確認調査でもわかっていたことですが、調査地には大小さまざまの河原石が混ざった土が堆積しています。この状態を難しい言葉でいうと氾濫原といいます。おそらく昔・むかしの小野川が何度も洪水を繰り返しながら流域に石や土砂を運び、堆積したものと考えられます。土器や石器はどちらかというと石の少ない部分の黄色味を帯びた土の中から出土しています。石混じりの氾濫原のあちこちに生まれた、沼地のような窪みに土砂とともに流されてきた土器や石器が溜まった状況であると考えられます。残念ながら、大昔のひとびとの生活の痕跡（住居や火を焚いた跡、貯蔵のために掘った穴や落とし穴など）は見つかりませんでしたが、上苅屋遺跡での出土とあわせて考えると、小野川流域のどこか、おそらく上流の山あいのあたりには当時のひとびとが暮らしていたのでしょう。

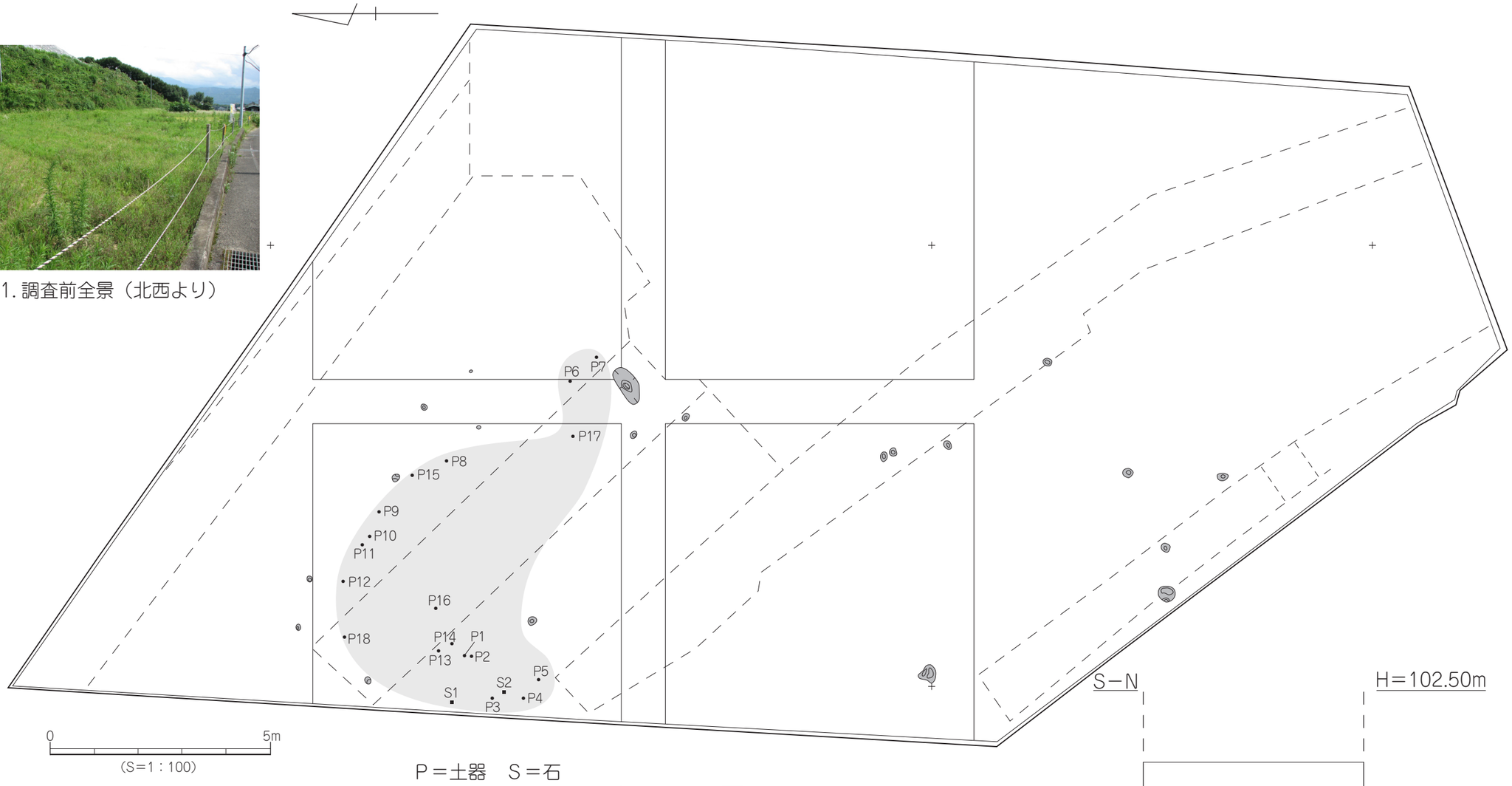
３．縄文時代早期の土器とその他の遺物について

調査で出土した土器は小さな破片ばかりですが、その中に押型文土器と呼ばれる土器片が数点あります。押型文土器とは、棒状の工具に山形や楕円形あるいは格子目文を彫刻し、これを土器の表面に回転させながら文様を施した土器です。今から７～ 8,000 年前の縄文時代早期といわれる時代に流行った手法で、北梅本乙井遺跡でみつかっているものは山形の文様がつけられたものです。もともとは、深鉢と呼ばれる底のとがったバケツのような形の容器であったものです。ちなみに上苅屋遺跡３次調査でみつかった押型文土器片は、楕円形の文様がつけられた鉢の破片でした。

そのほか、狩りのための弓矢に使った石鏃や、クルミやドングリなどの木の実を割ったりつぶしたりするための道具敲き石といった石器、石器を作ったときにできる石くずなどが出土していますが、これらのうちには香川県や大阪府で多くとれるサヌカイトや大分県の姫島でとれる白味をおびた黒曜石といった石材があり、当時の交易の一端がしのばれます。

出土した押型文土器の拓本（２倍に拡大）

1. 調査前全景（北西より）



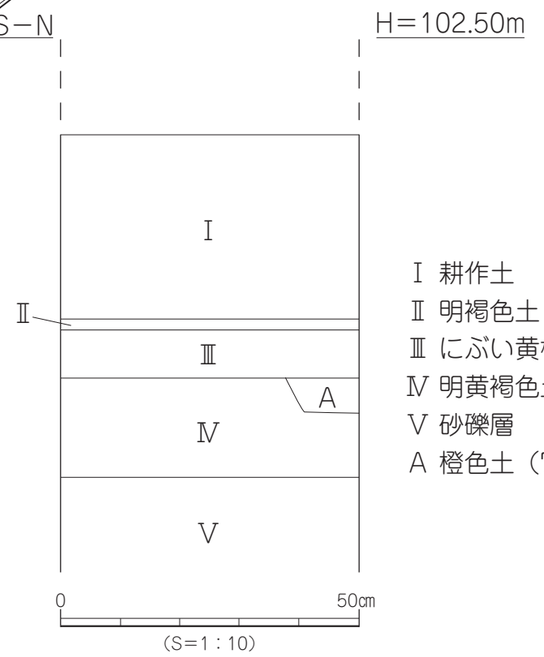
P＝土器　S＝石

遺構配置図

2. 掘削状況（南より）

3. 遺構検出状況（南東より）

4. 作業風景（南より）



Ⅰ 耕作土
Ⅱ 明褐色土（7.5YR5/8）〔床土〕
Ⅲ にぶい黄橙色土（10YR7/4）
Ⅳ 明黄褐色土（10YR7/6）
Ⅴ 砂礫層
A 橙色土（7.5YR6/8）

土層柱状図（西壁）